

20 アプリを利用した漢方診療が 症状緩和に効果的だった一症例

札幌中央病院 泌尿器科
市原 浩司

【症例】80代女性。2019年から子宮脱を伴う排尿困難、夜間多尿、繰り返す膀胱炎症状および慢性的な膿尿のため不定期に受診していたが、2021年以降通院が途絶えていた。初診から4年経過した2023年、尿意によらず突然失禁するとの主訴で再診となった。問診と診察を行い、2年前に受けた子宮脱に対する子宮摘除後の膀胱陰瘻が原因と判明した。下腹部切開による経膀胱アプローチにて瘻孔閉鎖術を施行し、以降は経過観察としたが、術後半年で膀胱脱を認めたため、婦人科に瘻閉鎖術を依頼した。閉鎖術から2か月が経過した時点で、排尿困難、夜間多尿、膀胱炎症状それぞれの悪化を認め再診となった。問診にて、婦人科手術の際にこれまでの投薬が全て休止されたことが判明した。現在は下肢の冷えが辛く、頻尿・尿意切迫感や排尿時痛、睡眠障害もあるとの訴えであった。尿沈渣にて膿尿を認め、過活動膀胱症状スコア（OABSS）は12点であった。対応として、排尿困難にウラピジル30mg/日、夜間多尿にトリクロルメチアジド1mg/日を以前から投与しており、これらを再開した。このほか排尿時痛と膿尿には抗菌薬のほかに猪苓湯合四物湯7.5g/日投与にて対応した。1か月後には下部尿路症状も改善したが、下肢の冷えが持続する、元気が出ない、食が進まないなどの訴えが認められた。このため、患者と携帯アプリにて漢方製剤の医療用サイトを閲覧しながら症状緩和に効果的な漢方製剤を検討することとなり、猪苓湯7.5g/日および半夏白朮天麻湯7.5g/日を選択した。投与1か月後から自覚症状は改善し、下肢の冷えが消失した。OABSSは投与前11点から4か月後5点と低下した。現在は、投与回数を自己調整しながら継続している。

【考察】猪苓湯合四物湯の投与では、排尿時痛や排尿困難、尿意切迫感の改善のほか冷え症状の緩和を目的としたが、効果は限定的だった。有効な治療法を検討するにあたり、患者側に漢方製剤への抵抗がなく前向きであったこと、演者自身は漢方薬の十分な知識が無かったことから、医療用サイトを利用し、患者の自覚症状を踏まえて半夏白朮天麻湯が選択された。結果的に本剤の効果が非常に高かった。日常診療に漢方を取り入れる際には専門的知識が無くとも、こうした手法は一案であると実感した。